

24. 興味ある所見を示した子宮頸癌症例について (carcinomatous papilloma について)

(大阪府立成人病センター)

横山 泰, 高橋 義浩, 西本 政長
本郷 二郎

(病理) 和田 昭

子宮腔部のsquamous cell papillomaの報告は少く、特に malignancy を示したものは、1964年 Pitkin らの報告によると諸報告を通覧しても15例に過ぎないと云う。

この報告では、本症の自験症例5例とその臨床所見・細胞診、コルポ診、組織学的所見を報告した。その内訳は、Kazal & Longの分類によれば、

carcinomatous papilloma……2例

basal cell hyperplasia を伴う solitary papilloma .
……2例

solitary papilloma……1例である。

carcinomatous papillomaの2例は、ともにsquamous cell carcinoma in situ 様で、その1例では micro-invasion 像が見られ、また上皮内の側方浸襲部に喫歯状の浸潤像が見られた。

諸報告から、carcinomatous papilloma の組織異型性がときに mild で benign と誤り易いこと、高年者・非妊例では特に注意を要することなどを述べ、condylo-matous p. との間に本質的な組織所見上の差のないことなどに言及した。

第7群 子宮癌の早期発見

25. 腔鏡診を中心とする子宮頸癌早期診断

(札幌医大)

橋本 正淑, 小森 昭人, 森 和郷
平沢 峻, 横山 幸生, 川瀬 哲彦

頸癌早期診断法として、過去4年来、腔鏡診、細胞診、組織診の三者併用により正確な診断を期しているが、5,500例の観察成績並びに腔鏡診による異常所見の follow up 成績につき報告する。① 性器出血が49.3%の第一位の自覚症状で、その66.7%は異常所見である。又無症状で来院せる者のうち7.9%は異常所見であった。② 当教室に於る腔鏡診所見分類と発生頻度を述べるが、5500例中17%の異常所見が発見された。③ 血管像のうち、異型血管の多くは侵入癌に見られ、異常所見の判別に役立つ。④ 腔鏡診により、所謂癌母地が見られた場合、照準組織診を要するが、又変換帯は上皮再生並びに退行の場であり、注意すべきである。⑤ 肉眼的に非癌とした5098例中より69例の侵入癌が三者併用により発見された。⑥ 侵入癌356例につき細胞診と腔鏡診の関係を見た。⑦ 腔鏡診により異常所見95例の follow up 成績につき、興味ある症例を述べる。

26. 子宮癌集団検診成績

(広島大)

藤原 篤, 平田 政司, 白砂 圭一
最近9年間、27回に亘って行った当教室の子宮癌集団

検診の総合成績は次の如くである。

(I) 一般的関連事項の調査成績

- 1) 受診者7706名の年齢別構成は35~39才が最も多く、ついで40~44才、45~49才の順であった。
- 2) 初経年齢は平均15.3才、閉経年齢は平均47.4才、結婚年齢は平均21.4才であった。
- 3) 妊娠率は95.2%、分娩率は92.8%、人工妊娠中絶率は38.1%、自然流産率は23.4%。
- 4) 受診者の近親者における癌罹患者頻度は24.8%で、臓器別には胃癌が最も多く(12.6%)、ついで子宮癌(9.1%)で、家系別には父母が最も多かつた(43.9%)。
- 5) 受診者中自覚症状が全くなくて受診したものが55.2%で半数以上を占めるに至った。自覚症状の中では腰痛と帯下が多かつた。

(II) 検診成績

- 1) 臨床診断：7706名中16名(0.2%)の子宮頸癌を発見し得た。

臨床診断では腔部ビランが最も多く(37.5%)、子宮後傾屈症が30.1%で、その他子宮筋腫が1%にみられた。

- 2) 細胞診：細胞診のみを行った6893名中陽性10名(0.2%)、疑陽性58名(0.8%)であったが、再検査の受診率が悪く、集団検診の実施方法に検討すべき問題点があるが、陽性又は疑陽性例中には老人性腔炎が最も多

昭和40年6月1日

561-91

く、著明な parabasal cell の dyskaryosis が認められることが多いので注意を要する。

3) 組織診：813名について細胞診と比較した結果、癌では適中率82.8%、疑陽性を加えると94.1%、非癌例では適中率は90.6%であった。細胞診における陽性又は疑陽性例中には上皮の異型性変化を認めるものが多く、特に dyskaryosis 細胞の量的及び質的検討は screening test として所謂臨床前癌の早期発見、更には前癌性変化の追求に重要な意義がある。

なお、今後の方針は手広く1回だけの検診を行うことよりも受診者の follow up に重点を置く。

27. 我教室に於ける子宮頸癌集団検診の成績について

(東北大)

九嶋 勝司, 野田起一郎, 姉齒 皎
 武田 雅身, 鬼怒川博久, 清水 秀光
 東岩 井久, 金田 尙武, 村井 憲男
 関井 正敏, 高橋 郁夫, 佐藤 祥男
 永井 宏, 藤田 光郎, 永井 正司
 山田 章雄, 鈴木 光蔵, 矢島 聰

我々は昭和37年1月以来、宮城県下の市町村に於いて子宮癌集団検診を行っているが、本年9月で検診総数12,231名に達したのでその成績の概要を報告した。

1) 検診を行った市町村の30才以上の婦人の総人口72,075名中12,231名の受診者があり、受診率は17%であった。

2) 全例に細胞診、大多数の例にコルポ診を行うことにより篩別した。

3) 12,231名の受診者中24名の頸癌患者を発見し、その発見率は約0.20%であった。皮内癌は6例ありその頻度は0.05%であった。

4) 発見された頸癌24例は大多数が初期癌であり(I期19例, II期5例),これと皮内癌6例の病理学的検索の結果について述べた。

5) 本年4月子宮癌検診車が完成したので、その使用状況を報告した。

28. 子宮癌集団検診成績

(岩手医大)

秦 良麿, 石浜 淳美, 佐藤 友義
 中村 義孝, 伊藤 禎一, 国本 恵吉
 浜津 吉男, 利部 輝雄, 黒川 元
 宮本 耕祐, 吉田 威, 飯田 民次
 松尾 正城, 古館 実

子宮癌は解剖学的関係から、もつとも診断しやすくもつとも治療しやすい癌であるにもかかわらず、その局所的關係から発見がおくることが多い。ことに農村のような文化のおくれたところでは、実際に遭遇するのはII期以後のことが多い。

この現状を打破するには、どうしても早期発見と適切な早期治療以外にない。

1表 細胞診, コルポ診, 組織診成績

| | | | | | | | |
|--------------|--------------------|------|------|-------|-----|-----|-------|
| 細胞診 | 型 | I | II | III | IV | V | 計 |
| | 数 | 811 | 641 | 94 | 7 | 0 | 1,553 |
| | % | 52.2 | 41.3 | 6.1 | 0.5 | 0 | 100.0 |
| 腔部コルポ ピラポ | 型 | I | II | IIIab | IV | V | 計 |
| | 数 | 29 | 113 | 36 | 5 | 1 | 184 |
| | % | 15.7 | 61.4 | 19.5 | 2.7 | 0.5 | 100.0 |
| 組織診 | Negativ | 28 | 103 | 28 | 0 | 0 | 159 |
| | Anaplasia | 1 | 10 | 4 | 2 | 0 | 17 |
| | Carcinoma in situ | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| | Invasive Carcinoma | 0 | 0 | 3 | 3 | 1 | 7 |

最近私どもは、岩手県紫波町の依頼により、子宮癌の集団検診を実施し、つぎのような成績をえたので報告する。なおこれに力をえて、この検診は今後も継続するつもりである。

1) 検診の対象は30才以上の婦人である。30才以上の婦人総数7,197名に対し、実際に受診したのは1,553名で、受診率20.8%であった。

2) 腔部ピランを有したものは184名(11.8%)であった。

3) 細胞診, コルポ診, 組織診の結果は表の通りである。

4) 子宮癌は上皮内癌1, 浸入癌7計8名(0.5%)であった。